

『シンデレラ』のチャップブック展：「舞踏会を走り去るシンデレラ」の挿絵を中心に
—— 「素朴な挿絵」から「現代風の挿絵」まで

問題 なぜシンデレラの「ガラスの靴」は真夜中を過ぎても「ガラスの靴」のままなのでしょう？

（答えは、この解題のどこかに書かれています。きっと大変なのでヒント。16番をどうぞ。）

はじめに

今回の展示は、鶴見大学図書館が貴重書として大切に保管、所蔵している「チャップブック」という豆本のコレクションをご覧ください。「チャップブック」というのは17世紀から19世紀にかけて特に英国で出版された簡易版の「本」のことです。豆本と書きましたが、実際には大小さまざまな大きさがあります。いずれにしても、正式な書物は一般の人々には高価なものでしたから、なかなか手にすることはできませんでした。そういうこともありロンドンだけではなく、地方都市でもさまざまな出版者がほとんどは著作権を無視して出版しました。米国で出版されたものもあります（本展示でも米国で出版された作品が2点(展示リストの5番と19番)あります）。

当時は「ペニー・ヒストリー」(penny history)と呼ばれました。ペニーは「貨幣の単位」で、ヒストリーは「ストーリー」(story)に近く、「話」というような意味です。ですから、チャップブックは「1ペニー程度（の安価な価格）で販売された本」ということになります。実際には、地方に行き行って行商する人たちが販売したり、おまけとして配ったりしたこともあったようです。その行商した人たちはチャップマン(chapman)と呼ばれ、そこからチャップブック(chapbook)という名前が出てきたと伝えられています。また、安価な意味の「チープ」(cheap)からチャップブックと呼ばれるようになったという説もあります。現在では、「ペニー・ヒストリー」ではなく、「チャップブック」の名称で呼ばれるのが一般的です。

今回は『シンデレラ』という昔物語のチャップブックを展示していますが、実際には様々なジャンルの内容の作品があり、当時の世相を実によく物語ってくれます。本学にも『シンデレラ』以外にもたくさんのチャップブックが所蔵されています。数ページの薄手の紙葉の「本」ですから、読まれてすぐに捨てられたり、ときにはトイレの落し紙として再利用(?)されることがありました。ですから大量に出版されながらもその多くは消えてなくなっています。ご覧いただくチャップブックのなかにはおそらく世界でも数点しか存在しないものもありそうです。これほど多くの『シンデレラ』のチャップブックが一か所に所蔵されているところは世界的に見てもかなり珍しいことです。本学図書館員の方々の長年のご苦勞のおかげであると感謝しています。長年チャップブックを調べてきましたが、手にする度に奇跡的に残った貴重な存在に驚嘆するばかりです。本当は実際に手に持って、ザラザラやパリパリの質感や独特なおいなどを感じていただきたいのですが、なにぶん古い資料ですからそれはかないません。ご容赦をお願いしたいと思います。

特に今回は、『シンデレラ』の挿絵の変遷をたどります。何とも言えない愛らしい「素朴な挿絵」から現代の漫画本や劇画本に登場するような「現代風の挿絵」があったりと、実にその表現は多彩です。英語版の『シンデレラ』の本家となるロバート・サンバーが訳した『昔話』(1729)の中にある『シンデレラ』には一枚の挿絵しかありません(展示リストの1番)。その場面は、真夜中になり慌ててシンデレラが舞踏会を走り去る場面ですが、今回はその場面を中心に時代を追ってご覧いただきます。チャップブックの中には同じ場面の挿絵が見当たらないものもありますから、その場合はその前後の挿絵をご覧ください。どれもがそれぞれに特徴があり、個性あふれる味わい深い世界が広がっていきます。挿絵の変化を実際にご覧いただくと、その変化は一様にはなくまだらに変化していくことがお分かりいただけると思います。あるところで突然に大きな変化を遂げたり、またあるところでは昔のままであったり、その時空が前後していきます。変化は徐々に進んでいき、そして、やがては大きな時間のうねりに飲み込まれていきます。ほんの数世紀の間に急激に広まり、劇的に姿を消していったチャップブック、小さい「本」ではありますが、大きな足跡を残しました。チャップブックがなければ、『シンデレラ』はこれほどまでの人気を保つことが出来なかったのではないかと思います。200年前の人たちがこうした本を手にしながらか読書を楽しみ心を豊かにしていたことなどを想像していただけましたら本当に幸いに思います。

≪ 『シンデレラ』 のチャップブック展示リスト ≫

- 1* 1729年の『昔話』 (*Histories, or Tales of Past Times*)の中にある『シンデレラ』 London
Cinderilla: or, the Little Glass Slipper.
 (『シンデレラ』が英語に翻訳された最初の本。チャップブックではなく、『ペロー童話集』(1697)をロバート・サンバーが初めて英語に翻訳した本のフォトグラフ版(出版年不明)を複写したもの)
- 2* 1764年の英語仏語併用のフルテキスト版の中にある『シンデレラ』 Londres 15.6×10.3 cm 227pp
Contes du tems passé de ma mere l'oye. (*tems*は*p*が欠落している書名で、本来の綴りは*temps*である)
Cinderilla: or, the Little Glass Slipper.
- 3 1760年頃から1790年頃のチャップブック 出版者、出版所不記載 17.2×10.1 cm 22pp
The History of Cinderella, & C.
- 4 1790年頃のチャップブック London 10.0×6.5 cm 31pp
The Curious Adventures of the Beautiful Little Maid Cinderella: or, the History of a Glass Slipper.
- 5 1800年頃のT. コリアーのチャップブック Litchfield 9.5×6.2 cm 29pp
Cinderilla: or, the Little Glass Slipper. (アメリカ東部、コネチカット州)
 (アメリカで出版された初めての『シンデレラ』のチャップブック)
- 6 1804年のタバートのチャップブック London 12.0×8.0 cm 36pp
Cinderella: or the Little Glass Slipper: A Tale for the Nursery.
Tabart's Improved Edition of Cinderella: with Coloured Engravings.
- 7 1809年のハワード & エヴァンズのチャップブック (韻文) London 9.6×5.6 cm 16pp
Cinderella: or, the Little Glass Slipper.
- 8 1809年頃のジョン・エヴァンズのチャップブック (韻文) (綴じ糸なし) London
Cinderella: or, the Little Glass Slipper.
 18×23 cm (一枚刷りの状態); 7.3×5.7 cm (八折判の状態) 16pp
- 9 1816年の“NEW JUVENILE LIBRARY”のチャップブック London 12.2×8.4 cm 30pp
Cinderella: or, the Little Glass Slipper.
- 10 1820年頃のJ. ケンドリュウのチャップブック (韻文) York 9.6×6.6 cm 16pp
 (イングランド北部、ノース・ヨークシャー)
Cinderilla: or the Little Glass Slipper.
- 11 1820年頃のJ. ケンドリュウのチャップブック (散文) York 10.4×6.7 cm 31pp
 (イングランド北部、ノース・ヨークシャー)
Adventures of the Beautiful Little Maid Cinderilla: or the History of a Glass Slipper:
To which is added, An Historical Description of the Cat.
- 12 1820年代のN. メリュデューのチャップブック Coventry 9.8×6.5 cm 31pp
 (イングランド中部、ウエスト・ミッドランド)
Cinderella: or, the History of the Little Glass Slipper.

- 13 1820年頃のJ. G. ラッシャーのチャップブック Banbury (2冊) 9.8×6.6 cm 16pp
(イングランド南部、オックスフォードシャー)
The Interesting Story of Cinderella, and her Glass Slipper.
- 14 1821年のジョン・マーシャルのチャップブック London 11.6×9.7 cm 21pp
Marshall's Edition of the Popular Story of Cinderilla, or; the Little Glass Slipper.
- 15 1822年頃のトーマス・リチャードソンのチャップブック Derby 10.3×6.8 cm 27pp
(イングランド中部、ミッドランド)
The History of Cinderella; or; the Little Glass Slipper.
- 16* 1825年頃のジョン・ハリスのチャップブック型本 (韻文) London 17.8×6.8 cm 15pp
Cinderella, or the Little Glass Slipper.
- 16-1* 1833年のフランスのパリで出版された本 (散文) Paris 10.7×13.9 cm 12pp
Cendrillon, ou la petite pantoufle de verre. 12 gravures.
(16番のジョン・ハリスの挿絵を利用した本。挿絵と文章(フランス語)が見開きに配置されている)
- 16-2* 1850年頃のグラント & グリフィスのチャップブック型本 (韻文) London 17.0×11.0 cm 15pp
Cinderella, or the Little Glass Slipper. (16番のジョン・ハリスの異版)
- 16-3* 1860年頃のグリフィス & ファランのチャップブック型本 (韻文) London 17.3×11.0 cm 15pp
Cinderella; or; the Little Glass Slipper. (16番のジョン・ハリスの異版)
- 17 1828年のオリヴァー & ボイドのチャップブック Edinburgh 14.2×9.3 cm 35pp
(スコットランド)
Cinderella; or; the Little Glass Slipper: An Amusing Tale.
- 18 1840年のオトリーで出版されたチャップブック (韻文) Otley 16.7×10.7 cm 8pp
(イングランド中部、ウエスト・ヨークシャー)
The History of Cinderella.
- 19 1842年のH. & E. フィニーのチャップブック Cooperstown 10.0×6.7 cm 30pp
(アメリカ東部、ニューヨーク州)
Cinderella, or the Little Glass Slipper.
- 20 1846年頃(以前)のチャップブック London 14.6×9.5 cm 36pp
Cinderella; or; the Little Glass Slipper: A Fairy Tale. 【四折りの一枚挿絵プレート付き】
- 21 1850年頃のチャップブック Glasgow 15.5×9.7 cm 24pp
(スコットランド)
The History of Cinderella, or; the Little Glass Slipper. To which is added, the Babes in the Wood.
- 22 1800年代(1810年頃から1850年頃)のA. K. ニューマンのチャップブック London 12.2×8.0 cm 30pp
The History of Cinderella, and her Little Glass Slippers.
Children's Books, No. 7 Dean & Munday
- 23* 1905年頃のチャップブック型本 London 12.2×8.2 cm 4pp
Cinderella Father Tuck's "PANORAMA" SERIES 【5枚のプレート、台紙付き】

* 1番、2番、16番、23番について

1番と2番はチャップブックではなく、本格的な書物となるフルテキスト版です。また、16番と23番は「チャップブック」ではなく、「チャップブック型本」とでも呼べる本です。16番(16-1番、16-2番、16-3番を含む)はチャップブックと同じ時期にチャップブックの範疇に収まらない「本」が現れていることや、23番のように少しあとの時代にもチャップブックの変形となる「本」が存在した一例として、敢えてその流れの中に入れることにしました。それらはチャップブックの進化形と見なすことができるものであり、現代の私たちがイメージする「絵本」や「玩具」へとつながる移行期の貴重な本であります。しかし、そもそも「チャップブックとは何か」という定義そのものが曖昧であるために「チャップブック」と「チャップブック型本」の違いを厳格に区別することが非常に困難である点も指摘しておきたいと思います。実はこれら以外にも『シンデレラ』の作品は本学図書館に多数所蔵されていますが、今回はチャップブックに類似したものとして展示は最小限に限定しました。

展示は、できるだけ出版の年代順に配置しましたが、出版年の記載のない本が多くありますので、また推定のものもあるなど、実際には前後しているものがあります。どうぞご了承ください。

解説 写真撮影
歯学部 人文科学研究室
准教授 木村 利夫

≪『シンデレラ』のチャップブック展観≫

1* 1729年出版のロバート・サンバーによる英語訳の『シンデレラ』（フォトグラフ版）

Histories, or Tales of Past Times: London
出版年は不明 オリジナルは1729年出版
Cinderilla: or, the Little Glass Slipper.
『ペロー童話集』（1697）の初めての英語翻訳本の中の一編

フランスのシャルル・ペロー(Charles Perrault, 1628-1703)の童話集、通称『ペロー童話集』(*Histoires ou contes du temps passé. Avec de moralités: Contes de ma mère l'Oye*) (1697)の初めての英語翻訳本である。翻訳はロバート・サンバー(Robert Samber, *bap.1682-c.1745*)によるものである。この作品はその『昔話』(*Histories, or Tales of Past Times*)(1729)のフルテキスト版の中にある『シンデレラ』であり、チャップブックではない。挿絵はこの一枚のみで、いわば『シンデレラ』の挿絵の原典とでも言えるものである。舞踏会から逃げ去るシンデレラが描かれている。今回の展示は、この場面を中心にして、さまざまなチャップブックを時代を追ってご覧いただくものである。

また、シンデレラの英語のスペルに注目していただきたい。現代のわたしたちが使用するものとは異なる *Cinderilla* というスペルが使われている。現在は *Cinderella* のスペルが使われるのが一般的であり、*i* と *e* の一文字が異なっている。

また、このロバート・サンバーが訳した『昔話』のタイトルページの前にある口絵の壁には「ガチョウおばさんの話」という張り紙が描かれている。この *MOTHER GOOSE'S TALES* という言葉から、今日の「マザー・グース」という呼称が始まることとしても有名である。

2* 1764年の英語仏語併用のフルテキスト版の中にある『シンデレラ』

Londres 15.6×10.3 cm 227pp

Contes du tems passé de ma mere l'oye. (*tems* は *p* が欠落している書名で、本来の綴りは *temps* である)

Cinderilla: or, the Little Glass Slipper.



これはチャップブックではない。さすがに、皮装丁の立派なフルテキスト版だけあって微細に渡り細かな描写がなされている。画面の前面に主人公のシンデレラと王子を配し、後方の背景に小さくお妃や踊る貴族たちを描くことで舞踏会の広間の空間の広さを感じることができる。シンデレラは体を傾け、逃げようとしながらもうしろを振り向き、脱げてしまったガラスの靴と王子に目をやっている。王子は腰をかかめ、シンデレラが落とした靴を取り上げようとしている。実に上品な挿絵である。

3 1760年頃から1790年頃のチャップブック

出版者、出版所不記載 17.2×10.1 cm 22pp

The History of Cinderella, & C.



目、鼻、口が点々と刻まれている実に素朴な挿絵である。挿絵は「小口木版」である。登場人物も多く、王冠を戴く王様や楽器を手にする楽団も丁寧に描かれている。シンデレラもうしろを気にかけるように振り向き体を斜めにして急いでいる様子がうかがえる。両手を前に差し出すようにしているが、あせる気持ちを表現しているのであろう。このような手を前に差し出すポーズの挿絵はこのチャップブック以降の版によく見られるものである。



実はこのチャップブックには『シンデレラ』物語とは関係のない挿絵が入れられている。『シンデレラ』に登場する動植物は、かぼちゃ、とかげ、ねずみ、ハツカネズミである。この挿絵はどう見ても六頭立ての馬車には見えない。騎馬隊のように剣を片手に、駆け巡る筋書きは物語にはどこにも見当たらない。

無関係な挿絵を平気で挿入してしまうこの「おおらかさ」というのか「無造作」というのか、これこそが初期のチャップブックの醍醐味であり、面白い点である。こうした挿絵の使われ方はしばしば見られ、また同じ挿絵を別の作品に使い回すことなども行われた。当時の読者もきっと、クスッと笑みをうかべたことであろう。

4 1790年頃のチャップブック

London 10.0×6.5 cm 31pp

The Curious Adventures of the Beautiful Little Maid Cinderella: or, the History of a Glass Slipper.



この挿絵に靴は見当たらない。素朴な絵柄であるが陰影をつけて多少の立体感をもたらしている。脱げたはずの片方の靴もなければ、シンデレラもうしろを振り向かず、ひたすら逃げることに専念している様子である。二人の横顔の目は点で描かれ、シンデレラの手などは繊細な描写とは言い難い。両手を前に差し出してほぼ同じポーズをとる二人であるが、その背景のデザインは大胆であり、右半分がアーチ型の曲線、左半分が四角形に対角線が斜めに走り、それぞれに逃げるシンデレラ、追う王子を配して対比を明確に示している。

5 1800年頃のT. コリアーのチャップブック

Litchfield 9.5×6.2 cm 29pp

Cinderella: or, the Little Glass Slipper.

(アメリカ東部、コネチカット州)

(アメリカで出版された初めての『シンデレラ』のチャップブック)



この挿絵は右に90度回転して縦長に印刷されているので、読者は首を斜めにしてこの挿絵を楽しむことになる。シンプルな構図は、先の4番のチャップブックを反転した格好である。二人とも両手を前に差し出しており、シンデレラはうしろを振り向かず、背景はアーチ型の曲線、一方の追いかける王子は斜線による直線的な世界である。この場面にも肝心のガラスの靴は見当たらず、平面的なタッチで、あまり動きを感じない印象をもつ。

このチャップブックはアメリカで出版された『シンデレラ』のチャップブックであるが、そのタイトルのスペルは Cinderilla となっており、ロバート・サンバーの『昔話』の『シンデレラ』と同じスペルを使っている。ペロー系統の物語ではあるが、大胆な変更がなされている点は注目である。実はこのチャップブックには魔法が使われない。名付け親は裕福なお婆さんという設定であり、かぼちゃもねずみも登場しない。手持ちの馬車を使わせて、舞踏会に着ていく衣装は馬車の中にあるトランクの中から選ばせるという趣向である。これまで調べてきた中で、魔法のないチャップブックはこの一作品のみである。当時の米国の世相を反映したものであろう。

6 1804年のタバートのチャップブック

London 12.0×8.0 cm 36pp

Cinderella; or the Little Glass Slipper: A Tale for the Nursery.



このチャップブックには舞踏会を走り去る場面の挿絵はない。「銅版」による挿絵もほんの3枚しかなく、この場面は舞踏会で仲良く踊る主役の二人が描かれているものである。紙葉一面を使い、縦長に印刷されており、手彩色が施されている。絵の下部には、見えにくいですが、London, Published by Tabart & C^o Aug. 7-1804.の文字が小さく刻まれている。

1700年代のチャップブックに見られるようなゴツゴツとしたタッチではなく、優雅で流れるような舞踏会である。流れる音楽やダンスのステップの音が聞こえてきそうである。主役の二人の踊る姿が中央におかれ、視線を集める。その衣装のひだも細かく描かれ、やわらかな素材感も伝わるほどであり、軽やかに踊る二人の息がぴったり合っていることがうかがえる。上方の中央には時計があり、よく見ると12時前の時刻を示している。周りで見守る女性たちのドレス姿も実に優麗かつしとやかで、頭部には当時流行した羽飾りが描かれている。

7 1809年のハワード & エヴァンズのチャップブック (韻文)

London 9.6×5.6 cm 16pp

Cinderella; or, the Little Glass Slipper.



紙葉はザラザラとした粗末な品質で、凹凸があるためにインクがうまくのっていない。王子の右手には羽飾りが見られ、両足を前後に開き膝を折り込んで靴を取り上げている。シンデレラのドレスは豪華であるが顔の表情は分からない。本文はこの挿絵の下部に配されている。

本文は、『シンデレラ』には珍しく韻文(詩)で、簡潔に物語の骨子が展開されている。次の8番の1809年頃のジョン・エヴァンズのチャップブックと、10番の1820年頃のJ. ケンドリューのチャップブックと一緒に見比べてほしい。

8 1809年頃のジョン・エヴァンズのチャップブック

(韻文) (綴じ糸なし) London

Cinderella; or, the Little Glass Slipper.

18×23 cm (一枚刷りの状態);

7.3×5.7 cm (八折判の状態) 16pp



7番のハワード & エヴァンズのチャップブックと同じ版木を使った挿絵である。エヴァンズが一人引き継いで版を重ねたものである。先の版よりも紙葉の凹凸が小さいので、絵柄の細部を鑑賞することが可能なはずである。しかし、本文の印字と同様に、挿絵も細かな線は明瞭さを欠き、太く滲むようになっているので、かろうじてその構図から右がシンデレラ、左が靴を拾い上げる王子と判別できるくらいである。7番のハワード & エヴァンズと比べると版木の摩耗が進んでいることが一目瞭然である。同じチャップブックを出版者が変わっても出版されることがあった好例であり、人気の高かったことの証である。さらに、10番の1820頃のJ. ケンドリューのチャップブックは同じ構図を使い、これら二つのチャップブックを模倣した別のチャップブックを出版している。

9 1816年の「新・児童書選集」のチャップブック

London 12.2×8.4 cm 30pp

Cinderella; or, the Little Glass Slipper.



このチャップブックには「銅版」による4枚の挿絵があるだけである。その中には舞踏会で走り去る場面は見当たらない。この挿絵は真夜中を過ぎて宮殿の門番の脇を通り、普段着の姿に戻ったシンデレラが走っている姿が描かれている。華やかな舞踏会が心残りなのか追ってくる王子を気にかけてか、やはりうしろを振り返るシンデレラである。彼女の左手にはガラスの靴が握られており、舞踏会の会場に落としてしまった片方の靴を逆に印象付けている。このような「靴を手にして逃げるシンデレラ」を描写する挿絵は極めて珍しいものである。靴であることが分かるようにかかとの端の部分こそと握った状態である。また、人物後方の堅苦しい無機質な建物とシンデレラの若々しさや着物のゆるる生き生きとした表現が対照的である。こうした門をあとにする挿絵には、彼女の足元に律儀にも元の姿に戻った動植物が並べて描かれているものもあるが(16番のチャップブック型本)、このチャップブックには見られない。この挿絵の主演は、小さいながらも左手の先にある「ガラスの靴」ということになろう。「銅版」ということで、より繊細な描写が可能となっている。タイトルページには「4枚の優雅な銅版画」と記載されているが、まさにその通りである。

10 1820年頃のJ. ケンドリューのチャップブック

(韻文) York 9.6×6.6 cm 16pp

Cinderilla; or the Little Glass Slipper.

(イングランド北部、ノース・ヨークシャー)



イングランド北部のヨークという地方都市で出版されたチャップブックである。J. ケンドリューは7番のワード & エヴァンズや8番のジョン・エヴァンズの『シンデレラ』のチャップブックを利用して、バージョン・アップしたチャップブックを作っている。韻文の8行の詩は同じものである。一方、挿絵はさすがに同じ版木を使うことは出来ないで、新たに制作したものであるが、二つの版を極力模して作られており、その構図はほぼ同じである。舞踏会での挿絵も、王子が両足を前後にして左膝を折り、右の膝が床につくほどに前かがみになり、紳士の振る舞いよくシンデレラの靴を拾おうとしている。シンデレラは一目散に顔も見せずに、また振り返ることもなく手を前に差し出して逃げている。背景はなくシンプルにまとめられているので、二人の状況が直接的に伝わってくる。もうひとつの特徴は、シンデレラの英語のスペルである。1729年のロバート・サンバーの版と同じ *Cinderilla* が使われているのである。これは懐古趣味というだけではなく、7番や8番が有する著作権を無視して作られたものであるから、二つの版との違いをつけて、何がしかの個別化を図る目的もあったのではないかと思われる。もっとも、チャップブックに関しては、お互いに著作権の意識は希薄であったと思われるので、それほど気にかける点ではないのかもしれない。

11 1820年頃のJ. ケンドリューのチャップブック

(散文) York 10.4×6.7 cm 31pp

(イングランド北部、ノース・ヨークシャー)

Adventures of the Beautiful Little Maid Cinderilla; or the History of a Glass Slipper: To which is added, An Historical Description of the Cat.



先の10番のチャップブックと同じヨークのJ. ケンドリューの手になるチャップブックである。こちらは韻文ではなく散文の『シンデレラ』である。挿絵は鮮明に描かれているが、舞踏会を立ち去ろうとするシンデレラの緊迫感は伝わらない。それは王子の立ち姿が追いかけるのでもなく、靴を拾うのでもなく、単に舞踏会でステップを踏んでいるのではないかと思われるほどである。顔の表情は3番や4番などの18世紀のチャップブックに見られるような点描に近い表現になっている。こちらも10番と同様に、シンデレラの英語のスペルはCinderillaを用いている。

12 1820年代のN. メリデューのチャップブック

Coventry 9.8×6.5 cm 31pp

Cinderella: or; the History of the Little Glass Slipper. (イングランド中部、ウエスト・ミッドランド)



舞踏会でシンデレラが逃げる挿絵は見当たらない。これは口絵であり、舞踏会に関する唯一の図版である。シンデレラと王子の舞踏会での出会いの場面であろうか。帽子を手にして、シンデレラに出迎いの挨拶をしているようにも見える。シンデレラは笑顔で応じており、そのふくよかな笑顔がとても印象的である。



この挿絵は、王子に仕える小姓が舞踏会で落とした靴にぴったりの足をもつ女性を探している場面である。このような宮殿の家臣がひとり挿絵に登場することは極めて珍しい。出版者の好みがよく出ている挿絵ということになるだろう。

13 1820年頃のJ. G. ラッシャーのチャップブック

(2冊) Banbury 9.8×6.6 cm 16pp
(イングランド南部、オックスフォードシャー)

The Interesting Story of Cinderella, and her Glass Slipper.



大量に出版されたことで知られるJ. G. ラッシャーの『シンデレラ』である。遠近法を用いて2人の人物や柱を大小に描き、白と黒のコントラストを上手に利用している。シンデレラは両手を前に差し出して、右方向に逃げようとしている。これまでの挿絵は平面的な描写であったのでシンデレラと王子はほとんどが横顔の描写であるが、この挿絵では柱と床の直線を手前から奥に配することで、空間的な奥行きが生まれ、靴を拾う王子はほぼ正面から描くことができるようになっている。シンデレラは横顔であるが、王子は正面の顔を見せることとなり、立体的な空間の中での対比も面白く、巧みな挿絵である。ここでも王子は膝を曲げてスマートに靴を取り上げている。このポーズが王子が靴を拾うお決まりのポーズとなっていることを感じていただけるであろう。

14 1821年のジョン・マーシャルのチャップブック

London 11.6×9.7 cm 21pp
Marshall's Edition of the Popular Story of Cinderilla, or; the Little Glass Slipper.



この挿絵には、逃げるシンデレラ、脱げた片方の靴、靴を拾おうとする王子、そして時計が描かれている。シンデレラの姿はすべてがエレガントで、洗練されている。手彩色による色彩がよく映えるやさしいほどに美しい挿絵である。時計に注目してほしい。短針は12時の少し手前を指している。実際には長針が12時を指しているので、短針は重なって見えないのであろうが、真夜中の12時を過ぎていないことを表すために演出されているのであろう。シンデレラは華麗なドレス姿であるから真夜中の12時を超えてはいけぬ。現実的な解釈を経たうえでの不思議な時計の描写である。

しかし、このチャップブックはそれだけではない。もう一枚の挿絵をご覧ください。



一般に「魔法使いのおばあさん」と呼ばれている女性は、実はシンデレラの名付け親であり、妖精でもある。彼女は舞踏会に行きたいと嘆き悲しむシンデレラのもとを訪れる。動植物を取りに行けと命じると、シンデレラは言われた通りにする。そうして六頭立ての馬車が完成する。この挿絵では変身する前と後が重ねて描写する技巧が施されている。名付け親が持つ（魔法の）杖は長めで、背格好も小柄で鉤鼻（かきばな）であり、魔法使いという風貌をかもし出している（『ペロー童話集』や『昔話』の本文には「魔法」という言葉はないし、杖の長さや名付け親の風貌についても示されていない）。上方に鎮座する月は、デフォルメされた三日月で、上下の端と端が円の半径を超えて（実際には起こり得ない）おり、現代の漫画や劇画の描写に通じる感がある。手彩色は大胆に手早く色付けされたものであるが、実に鮮やかで一枚一枚が手作業で塗られたことを考えると一層に愛らしく思えてくる。

このマーシャルのチャップブックは、『シンデレラ』のチャップブックの頂点を極めた完成度の高いものである。その装丁も実に手の込んだ作り方をしている、総合的に見るとチャップブックの範疇に入るぎりぎりのところになるろう。

15 1822年頃のトーマス・リチャードソンの

チャップブック Derby 10.3×6.8 cm 27pp

The History of Cinderella; or, the Little Glass Slipper. (イングランド中部、ミッドランド地方)



地方都市ダービーの地で出版されたものである。このリチャードソンのチャップブックには舞踏会で立ち去るシンデレラの場面の挿絵は見当たらない。この挿絵は仲良くダンスをするシンデレラと王子が描かれている。主役はあくまでも踊る二人であり、動きを感じさせ、顔の表情に特徴のある表現である。高い天井のホールや豪華で装飾豊かな宮殿での舞踏会を彷彿とさせてくれる。

16* 1825年頃のジョン・ハリスのチャップブック型本

(韻文) London 11.0×17.0 cm 15pp

Cinderella, or the Little Glass Slipper.



このジョン・ハリスの『シンデレラ』はチャップブックではない。チャップブックから発展したもので、絵本に近い形態であり、今日わたしたちがイメージするような「絵本」がもうすぐ登場することを予感させるものである。

舞踏会を走り去るシンデレラの挿絵は見当たらず、その直後の門を出るシンデレラが描かれている。シンデレラは元の普段着に戻り、足元には「ねずみ」が1匹、「ハツカネズミ」が6匹、「トカゲ」が6匹、そして「かぼちゃ」が1個描かれている。これらはまさに名付け親がシンデレラに用意させたもので、『ペロー童話集』に出てくる動植物のフルセットである。シンデレラの表情を含め、人物の描写は写実的で、しなやかで現代的である。

しかし、わざわざシンデレラの足元には元の姿に戻った動植物が置かれているが別の意味でリアル感がある。『ペロー童話集』にも真夜中を過ぎた直後のことは詳しくは書かれていない。当然ながら動植物は元の姿に戻っているはずで、そうした疑問に答えるようにすべてを視覚化した格好になっている。

ところで、シンデレラの「ガラスの靴」は、真夜中を過ぎても変化をすることはない。その理由はうまくできていて、ほかの動植物とは一線を画している。実は、舞踏会に出かける前に名付け親がシンデレラに手渡すことになっているのである。そうすれば、逃げたシンデレラを探す手掛かりとなる靴もちゃんとそのままに存在することができる。ガラスの靴は、最初からガラスの靴なのである。（これが問題の解答です）

本文は6行の詩からなる韻文である。本文も大切であるが、圧巻は手彩色の挿絵であり、強烈に読者を惹きつける魅惑的な美しさを持ち、異版も多数残っている（16-1番、16-2番、16-3番）。

16-1* 1833年のフランスのパリで出版された本

(フランス語の散文) Paris 10.7×13.9 cm

12pp

Cendrillon, ou la petite pantoufle de verre.

【16番のジョン・ハリスの本の挿絵を使った異版】

この本は、16番のジョン・ハリスの本の挿絵を使った散文による物語である。ハリスの『シンデレラ』は人気があり、ハリスの出版社を引き継いだ人たちも同じスタイルの本を継続して出版した。それが、16-2番と16-3番にあたる。この人気は英国だけではなく、「本家」であるフランスに凱旋する形となった作品である。ただし、この版は版型も変わり、サイズも横長で、小さくなっている。挿絵と文章（フランス語）が見開きに配置されているが、使われている12枚の挿絵はジョン・ハリスの版と同じものに見えるが、実は異なるものである。顔の表情や長柄の斧などの細部を見比べてほしい。

**16-2* 1850年頃のグラント アンド グリフィスの
チャップブック型本 (韻文)**

London 17.0×11.0 cm 15pp

Cinderella, or the Little Glass Slipper.

**16-3* 1860年頃 グリフィス アンド ファランの
チャップブック型本 (韻文)**

London 17.3×11.0 cm 15pp

Cinderella; or, the Little Glass Slipper.

16-2番、16-3番はともに16番のジョン・ハリスの『シンデレラ』の異版である。ジョン・ハリスはロンドンのセント・ポール大聖堂の地に店を構えたが、これは子供向けの本を出版した先駆者であり、「児童書の父」と呼ばれるジョン・ニューベリー(John Newbery, 1713-67)の開業の地とまさに同じ場所にあたる。ハリスはニューベリーの後継者のひとりであり、ハリスの『シンデレラ』はグラントとグリフィスが引き継ぎ、またその後をグリフィスとファランのコンビが継続して出版されることになった。いずれも正確な出版年は分からないが、同じ内容で同じスタイルの作品が実に長期に渡り出版されたことになり、いかにこの作品が人気の高いものであったかを示すものである。その人気を支えたのは、その大きな挿絵であったことは言うまでもない。しかも、カラフルに手彩色で綺麗に塗られている読み物は挿絵を見るだけでも楽しめるものである。『シンデレラ』は人気不衰なことなく今日まで読み継がれることになるが、これら16番の作品群はそのことを実感させてくれる貴重な一連の資料である。

17 1828年のオリヴァー & ボイドのチャップブック

Edinburgh 14.2×9.3 cm 35pp

(スコットランド)

Cinderella; or, the Little Glass Slipper: An Amusing Tale.



これは口絵であり、本文中にある挿絵ではない。シンデレラは両手を前に差し出してうしろを気にしながら逃げようとしている。落とした靴は床に落ちたままで、王子は拾おうとすることなくシンデレラを追いかけてしようとしている。本来であればこの口絵が置かれるはずの箇所には次の挿絵が描かれている。



この挿絵は二回目の舞踏会の話が展開されるページに置かれているが、これがどの場面を表しているのか分からない。赤いドレスの女性はシンデレラであろうか。舞踏会は二晩連続で開催され、シンデレラは名付け親によ

り異なるドレスを身につけていくことになっている。仮にこの赤のドレスの女性がシンデレラとすると、口絵のシンデレラの緑のドレスと異なることになり矛盾が生じてくる。また、左の男性も口絵の王子が身につけているタイツをはいた服装とも異なっているので、どうやら王子ではなさそうである。となると、赤のドレスは王妃であり、左の男性は彼女のお付きの者ということになるのだろうか。しかし、そうなると物語の展開でなくてはならない挿絵であるとは思われない。とても不思議な挿絵である。一般にチャップブックには様々な珍現象が見られるが、このチャップブックでは他にもシンデレラの衣装について一貫性を欠く部分が見えてくる。口絵にあるシンデレラのドレスは、実は最初の舞踏会で身につけたドレスなのである。最初の晩は、シンデレラは名付け親の言いつけを守って、真夜中になる前に家に戻ってくるので、走って逃げる必要がない。こうした細かな矛盾や不統一なところもチャップブックならではの楽しみであり、それを探するのもまたチャップブックの楽しみの一つである。

もうひとつの例として、次の挿絵を見てほしい。



これは最初の舞踏会で、シンデレラをエスコートしている様子が描かれている挿絵である。奥のテーブルには夜食に出される飲み物が用意されている。舞踏会ではふつう軽食が出され、『ペロー童話集』でもそうした言及がなされている。細かなことになるが、シンデレラのドレスの中央部分の横に走る絵柄が見当たらない。これなども面白い現象である。これが意識的なものとしたら脱帽である。

そして、もう一枚、次の挿絵は特に注目である。



名付け親が魔法の杖で触れるとシンデレラの普段着は奇麗なドレスに変身する。これが一回目の舞踏会の衣装であるが、シンデレラのドレスの様子が違っている。

また、このチャップブックは後年にアメリカにおいてすっかり真似た別のチャップブックが作られた。それが19番のチャップブックであるが、二つの違いと類似がはっきりと見て取れるのがこの挿絵である。名付け親とシンデレラの距離がまったく異なっている。それ以外は背景を踏めてなかなか瓜二つの状態で酷似そのものである。

18 1840年のオトリーで出版されたチャップブック

(韻文) Otley 16.7×10.7 cm 8pp

The History of Cinderella.

(イングランド中部、ウエスト・ヨークシャー)



逃げるシンデレラの顔を見ることはできない。彼女の手を前に差し出す姿や王子の膝を折り曲げて脱げた靴を拾う姿は「定番」となるポーズである。王子の目と右手はシンデレラを追い続けており、王子の心境を代弁しているようである。この『シンデレラ』は16冊のシリーズのうちの最初の作品である。

19 1842年のH. & E. フィニーのチャップブック

Cooperstown 10.0×6.7 cm 30pp

(アメリカ東部、ニューヨーク州)

Cinderella, or the Little Glass Slipper.



このチャップブックには舞踏会でシンデレラが逃げる挿絵は見当たらない。このフィニーのチャップブックは、先の17番の1828年のオリバー&ボイドのチャップブックを模倣して作られたものである。したがって、口絵には舞踏会を逃げ去るシンデレラが置かれるはずであるが、どこにも見当たらない。本文はほとんど同じであり、挿絵については同じ版本を使ったと思えるほど酷似している。何もここまで似せて作る必要がどこにあるのかと理解に苦しむほどである。このシンデレラと名付け親が並んだ挿絵と17番の1828年のチャップブックを比較していただきたい。同じ構図であるが、二人の距離が全く異なっている。10番のJ.ケンドリューのように、構図を似せる程度で制作することもできたであろうが、わざわざほとんど同じ図版と見間違えるほどになっている。このフィニーのチャップブックは基本的に同じ場面の挿絵を使っているが、面白いことに1828年の版にある「赤いドレスの女性とお付きの者」の挿絵は割愛されている。文脈にそぐわないと冷静に判断したのであろう。同じDNAを持つチャップブックながら、それなりに変化を遂げて「進化」している。

20 1846年頃(以前)のA Ladyによる

チャップブック

London 14.6×9.5 cm 36pp

Cinderella; or, the Little Glass Slipper: A Fairy Tale. (四折りの一枚挿絵プレート付き)



このチャップブックは一風変わったチャップブックである。挿絵は本文中にはなく、本文が終わったあとの巻末に一枚のプレートにまとめて描かれている。したがって、この版をチャップブックと呼ぶことができるかどうか微妙なところであるが、版型や紙質などからチャップブックに属するものとして差し支えないであろう。この挿絵は舞踏会から逃げるシンデレラの場面であるが、「階段」を駆け下りる様子が描かれた珍しいものである。時計の針はとうに真夜中の12時を過ぎている。したがって、シンデレラが着ている洋服は舞踏会で身につけた綺麗なドレスではなく、普段着のものである。後方で手を広げている人物は王子であるが、その位置や彼の視線からすると普段着に戻ったシンデレラの姿を目にすることになる。『ペロー童話集』や『昔話』では、王子はシンデレラのを追いかけるが、すぐに見失ってしまうので、この挿絵の描写は大胆に脚色された演出ということになる。この版の本文には、「王子はあとを追いかけてましたが、そのことでシンデレラはいっそうにその足を速めることになりました。」とあり、原作の域を超えるものではない。また、そのあとには「あまりに急すぎたので、シンデレラは片方の靴を落としてしまいました。」と続け、合理的な解釈を示している。『シンデレラ』の物語を知る読者は、子供であっても、普段着のシンデレラと王子が同じ空間にいるその不思議さに気づいてそのことを話題にしてあれこれと話をしたのかもしれない。それにもまして手彩色による色付けは実に鮮やかで読者を楽しませたことであろうから、前半の本文と巻末の挿絵を行ったり来たりと何度もページをめくったに違いない。

21 1850年頃のチャップブック

Glasgow 15.5×9.7 cm 24pp

The History of Cinderella, or, the Little Glass Slipper. (スコットランド)



これは表紙となるタイトルページである。本文中に挿絵は一枚もない。図版は書名の下に邸宅が描かれている一枚だけで、直接に『シンデレラ』と関係するものではない。英国の北部にあるスコットランドのグラスゴーで出版されたチャップブックである。1850年頃を境にしてチャップブックの人気も急速に衰えることになり、薄手の紙葉に印刷されたチャップブックはその役目を終えることになる。それを予感させるほど象徴的にシンプルな形態である。このチャップブックは『シンデレラ』のチャップブックの最終期における出版のひとつになる。ほとんどの『シンデレラ』のチャップブックは挿絵と本文がセットになっているので、挿絵のないこの版はとても珍しいチャップブックである。人気も衰えたのか、紙質も粗末で、出版コストを極力かけずに出版することを念頭にしたものであろう。

22 1800年代(1810年頃から1850年頃)の

A. K. ニューマンのチャップブック

London 12.2×8.0 cm 30pp

The History of Cinderella, and her Little Glass Slippers.

Children's Books, No. 7 Dean & Munday



出版年が不明であるが、1800年代ということで本学図書館では登録されているチャップブックである。推定では1810年頃から1850年頃の出版のものと思われる。挿絵はシンデレラとガラスの靴に照明のスポットが当てられている。王子の姿は見えるが黒く浮き彫りにされており、独特の演出である。裏表紙には Children's Books と題されて、子供の読み物として販売されていたことが明記されているが、見る者の想像力をかき立てるような工夫が凝らされた現代風に進化した挿絵である。

23* 1905年頃のチャップブック型本

London 12.2×8.2 cm 4pp

Cinderella Father Tuck's

"PANORAMA" SERIES (5枚のプレート、台紙付き)

この本はチャップブックではない。一般的に20世紀に出版された本は、チャップブックとは呼ばれない。確かに派手な表紙をしているので、チャップブックではないことを感じるができる。しかし、表紙をめくり本編を見るとチャップブックの簡素さが残っているので、時代を遡ってしまいチャップブックではないかと思ふばかりである。サイズもチャップブックに類似しているが、本文は4ページのみである。巻末には、型取りをしたフィギュアがまとめて5枚分つながられてカラー印刷されている。その前ページにはフィギュアを立てるための緑色のスタンドとなる台紙が付いている。本文は脇役で読み物というよりは人形型のフィギュアがメインであり、それを自分で切って、スタンドに立ててお遊びをすることのできる本である。チャップブックはこのように20世紀に入っても影響を及ぼしているのである。



むすび

今回の展示では、『シンデレラ』のチャップブックにある「舞踏会を走り去るシンデレラ」の挿絵を中心にご覧いただきました。『シンデレラ』という同じ作品を扱う挿絵ですが、それぞれが異なる顔を持ち、個性あふれる自己主張をしていることが分かります。著作権を無視して、まったく同じような挿絵の作品も作られますが、そのこと自体がチャップブックらしさを表しています。実に自由でおおらかです。チャップブックは、小口木版による朴訥（ぼくとつ）とした素朴な挿絵から始まりますが、ひとたび変化が生じるとその進歩の歩みは誰にも止めることができません。銅版画による繊細な描写も見られ、洗練さと優雅さが加わってきます。そこには紙葉や印刷や装丁などのさまざまな印刷技術の発達も関係しています。チャップブックを手にしていると、小さい小冊子ではありますが、作り手のぬくもりがぎっしりと詰まっていることを感じることができます。物語とは関係のない挿絵が入っていたり、一枚一枚を水彩絵の具で塗られたりと作られた当時の喧騒が目に見えてきます。出版者たちは制作コストも考えながら、工夫を凝らし、したたかに制作を続けていきます。読者である子供たちの喜ぶ顔が見たかったのでしょう。ですが、さすがのチャップブックも時代の波には抗することができませでした。技術の進歩により「書籍」の価格も下がり、わざわざチャップブックのような簡易版の「本」を出版する必要がなくなってしまいます。『シンデレラ』のチャップブックに限りますと、100年ほどの短い期間の出来事となります。それだけに本学図書館に文化的遺産と言えるチャップブックがこれほど数多く所蔵されていることは非常に意義のあることであると思います。大英図書館やオックスフォード大学のボードリアン図書館などでもこれほどの『シンデレラ』のチャップブックのコレクションは見当たらないと記憶しています。改めて歴代にわたる図書館の皆さまのご尽力に心よりの感謝と敬意を申し上げます。特に今回の展示では、府川修次さん、寺島久美さん、池田和広さん、堀はな恵さんには大変にお世話になりました。感謝を申し上げます。

解説 写真撮影
歯学部 人文科学研究室
准教授 木村 利夫